

佐渡米通信

こめ〜る

2019年 09 月号

発行日:2019年9月

編集人:佐渡農業協同組合 営農事業部米穀販売課 藤巻
Jasadoeinoubu20@dune.ocn.ne.jp

稲刈りまであと..

佐渡の梅雨明けは7月25日で、それ以降は30度を超える日が多くなりました。令和初の米づくりは、全般的に日照が良く好天続きであったことから、茎数が多く豊作が期待できます。早生品種のこしいぶきは7月23日、コシヒカリは8月5日頃と、例年よりも2~3日早い出穂が確認されました。佐渡は盆を過ぎると急に気温が下がり、夜温との格差も広がりますので、結果として収穫は平年とそれほどかわらない時期になると予想しています。



1等米比率90%以上に向けて、 水管理を実施中

8月1日から、佐渡米未来プロジェクトの実証圃を会場に、水管理指導会が行われました。「例年、佐渡米の2等以下への格落ち理由は、「整粒不足」や「未熟粒」となっています。未熟粒の発生を防ぐためには、水管理をしっかり行う必要があり、出穂の30日後までは、ほ場内に水を切らさないように間断かん水に努めましょう」と呼びかけました。日毎の天候に合わせて細かい水管理を行うことで、未熟粒や乳心白など、品質を低下させる粒の発生を抑えられることから、毎年水管理指導会をおこなっており、併せて、予察調査結果に基づくカメムシの発生予想が、本年度は多い予想であることもお伝えし、適期の防除の呼びかけを行いました。



新しいえさ場にトキは来てくれるかな

7月27日、島内外から100名近い参加者が集まり、ピオトープ作りが行われました。ピオトープづくりは、休耕田を鍬で掘り起こし、近くの水路から水を入れる作業から始まります。掘り起こされた土に水が入ると、そのままでは土に浸み込むだけなので、耕したり、縦に並んで電車ごっこの要領で土と水を踏んでかき混ぜたりして、水が漏れないように泥を柔らかくします。水が溜まり、ピオトープとなった休耕田は、それまで見えなかったカエルやその他の水生生物など、多くの生きものが見つかり、子供たちを中心に生きもの調査も行われました。



田んぼにどれだけのいるのかな

6月の第2日曜日に続き、8月の第1日曜日である8月4日は、「佐渡市生きもの調査の日」で、島内各地で生きもの調査をする農家の姿が見かけられました。日中は気温が上がり暑くなることから、朝早い時間から網やカゴを持って集落単位等で集まり、調査が行われました。8月の生きもの調査は、田んぼの中を歩くには稲の背丈が伸びていて歩きにくい為と、稲の根を踏切ってしまう生育不良になってしまう為、田んぼの中には入りません。そのため、畔から水田内に手を伸ばして網で泥をすくったり、畔にいる生きものを調査したりします。集落単位で実施すると、隣接地であっても探す人によって見つける生きものの種類が違うこともあり、カエルやドジョウ・タニシ等の水棲生物以外にも、トンボやクモ、ヘビなどを見つけたと調査野帳に記入し報告する方もいらっしゃいました。



今年も甘いメロンが出来ました

お盆頃、佐渡産メロンが出荷ピークを迎えました。8月にはいつすぐの出荷目合わせでは、出荷規格や箱詰めの方法を確認し合い、出荷時の注意点など質疑が活発に行われました。持ち寄られたメロンは、「アールスナイト」と「グランドール」の2品種で、実際に切って中身を確認したり、糖度計で糖度を測ったりしました。特に「グランドール」という品種は糖度が高く、今年もとてもおいしいメロンが出来たと、生産者は満足そうでした。



「グランドール」という品種は、種の周りのピンクがかったオレンジ色がトキの羽の色に似ているため、佐渡では「トキ色メロン」の愛称で呼ばれていて、食べる30分くらい前に切り分けて冷蔵庫で保存すると、オレンジ色の部分が更に色濃く出て、おいしさもアップするそうです。

